

蘇芳集

柗

青山

丈

窓にある昨日と今日の年の内
潜るまで居れば潜りぬ鳩
探梅の帰りのバスで夜になる
浅草の月の半ばの松飾
箸一膳皿一枚と去年今年
羽子をつくたび声を出す女の子
柗の花その他を見る日かな

冬休み

八木下末黒

枯菊の枯の極みの錆朱かな
冬紅葉みどりの残る一枝かな
青天の松葉の光る松手入
固まつて緋鯉のみなも冬日向
年の瀬の運河の時間静かな
数へ日やドクターへリが降りてくる
冬休み子の宿題の手本書く

冬の雷

吉田幸敏

身の闇の牡丹焚火に照らさるる
十二月八日背後に閉まるドア
抱く子の不意に角張る冬の雷
寒雷や結び直して紐と紐
剪りつべし冬菊に色残るとも
演壇に風呂敷畳む漱石忌
父よりは生きて三年日記買ふ

冬 椿 小川美知子

次の日がつぎつぎと来る散紅葉
冬麗のときどき揺れる橋渡る
枯深し水が水音立ててをり
浮寝鳥向かうの方へ吹かれけり
考へてゐると柚子寄る柚子湯かな
用のない日は風邪引いてゐたりけり
出先で取る主宰の電話冬椿

存 問 木内憲子

存問の鐘の音や着ぶくれてゐる
水鳥も水のおもても十二月
ひとつまみ程をつつじの返り花
胸ひらく冬噴水の高ければ
メールにもこゑありクリスマス日和
一陽来復よく話しよく歩き
ひと死ぬる夢に目覚めて寒きかな

車 待 つ 小島みつ如

車待つ篠が葉さやぐ冬の朝
日の燦さん冬サルビアの赫あかと
湾師走空にま白き三重の雲
散紅葉懐紙にしをりお堀端
碁会所に亡夫在すか散紅葉
ポスト迄杖と五十歩枯木星
昭和遠し歳晩のとろろ御飯も

葉 清水裕子

蓮枯れ池の底まで昼日射
竹垣の切り口清し七五三
桜おちば葉るよ空白のページ
茶が咲くや日毎電話に追はれもし
記さねば言葉は忘れ室の花
味うすき冬のはじめのオムライス
愛読の本に葉を文化の日

冬日まつすぐ

下平直子

雪 女

野路斉子

切干の昭和の匂ひして甘し
西空を日照雨の走る干大根
母在さば手編みセーター届くころ
文机に冬日まつすぐ誕生日
百畳の塵ひとつなき寒さかな
綿入を羽織れば母の香のかすか
庭畑の菜の育ちよき冬籠

日向ぼこ

富田正吉

まなぶたに日を集めたる日向ぼこ
鳩のゐるあたりもやもやしてゐたり
やすらぎは近くにありて石路の花
返り咲く花うすうすとありにけり
綿虫は夢のつづきのやうに飛ぶ
十二月八日の飯はかがやけり
芭蕉忌の角を曲ればすでに旅

冬蝶の方向転換とは苦手
雪女明日来ると云ふ笹の揺れ
ことごとく枯木枯れざるものはなく
誰彼に似る嬉しさの雛の顔
他人ごとなれど隣家の梅ひらく
どつと落ちし椿は森の落としもの
この明るさ木の芽起こしの雨かとも

声をしみ

前田陶代子

鉛筆の文字の固き漱石忌
松の幹いよいよ黒く十二月
マスクして誰かれに声をしみけり
鳥を翔たせて蘆むらの枯一途
鴨の陣見てゐて何も考へず
噴水の真白き高さクリスマス
呑み干して珈琲苦し枯ふかし